



高橋余一の「生活絵巻」



上の絵に書かれた文章

ちようけ

おへそで中へ出ている

野天風呂

寒くなると土間へ持ち込む

隣同士で順番に風呂をたて拍

子木を打って風呂のあるのを

知らせもらい風呂だった

26 野天風呂

絵巻には、木製の風呂おけに子どもが入っている様子が描かれています。ちようけは、柄のついた手おけのことで、手おけがなまってちようけと発音したと思われる。

丸い川石の上にげたが揃えて置いてあります。手拭いは、うち織りの地木綿(手織りで作られた綿布で主に自家用に用いたもの)でした。

火をたく釜の部分はブリキでできており、風呂おけの中へ差し込む構造をしています。へその形に似ていることから「ヘソプロ」とも呼びました。まきやワラのたき物で沸かしました。

昭和20年代頃までは、「もらい風呂」といって、近所で風呂を沸かした家に入りに行っていました。多くの人が入ったため、最後は湯がどろどろになっていたそうです。

先月号で掲載した高橋余一の「生活絵巻」について、連載回数の表記が間違っていました。正しくは、「25 蚕室の消毒」となります。お詫びして訂正いたします。